

## 【VI】 好敵手、桜と椿

桜と椿は分類学的にはまったく無縁で、何の関わりもない。にもかかわらずここにまとめて取り上げるのは、民俗学的といおうか風土的といおうか、はたまた歴史的にとでもいおうか、よく似ている部分とまったく正反対の部分とを互いに持っており、言ってみればいい好敵手なのである。人間の歴史の中で植物との関わりを紐解いてみると、この桜と椿との関係は実に興味深い。人間でいえば人格みたいなものを尊重しながら、この両者を比較すると、この両者にそのような個性を付与した日本人の精神構造の一部が、垣間見えてくるような気さえしてくるのである。今ここで桜と椿の好敵手ぶりについて、いくつか触れてみることにしよう。

まず桜と椿の似ている部分とはいうと、ともに神代の昔から日本の春を代表する花木で、ともに神聖な木として扱われ、『記・紀』にもまた『万葉集』にもその名が見られる。このためどちらも、あちこちの神社等でご神木とされたり、因縁のある木となっているばかりか、その花の美しさから、ともに絵画、建築、工芸、調度品などを初めとして、芸術や文学の題材などにもなっている。またその材の優秀さのために用材として、しかるべき重要な部分で用いられている。

これに対して、異なっている点はどうだろうか。これはまず第一に「散り際の哲学」ということにでもなろうか。桜ははらはらと花吹雪を誘いながら優雅に散ってゆく。椿はといえば花全体が、まるで打ち首にでもあったようにポトリと落ちる。この結果、桜はあちこちに植えられて、武士から農民にいたるまで圧倒的な指示を取付けた。一方の椿は神社仏閣などの比較的限られたところに植えられるようになった。また桜が陽樹であるのに対して、椿は日陰にひっそりと咲く陰樹で、正反対である。まあ、こんな点がその主な相違点である。

以上のような事実は、桜と椿のその後の有り様を決定的にしてしまった。かたや武士の散り際の美学として、かたや打ち首につながる不吉な予感として、認識されるようになったのである。しかしともに日本人にとって、大きな財産であることには変りない。そして今後も世界中で多くのファンを獲得してゆくことも確かである。

※旗弁(キベン)=雄蕊が弁化したもので、桜や椿の雄しべは旗弁化するものが多い。

このために複雑な花容を呈するものも多く、種類を多様化させている。一方マメ科植物にも旗弁があるが、これはもともとが花弁で、雄蕊の変形ではない点が異なる。植物の花や葉の構造や名称等に関しては[\[植物の用語集図説\]](#)をご覧ください。



桜便りがあちこちから聞こえてくる3月下旬から4月上旬、野山ではツマキチョウが姿を現す。しかし最近ではこの蝶もよほど郊外に行かないと見られなくなってしまった。これは地球温暖化のせいではない。田園の崩壊が原因のようで恐ろしい(2013.05.14.長野県軽井沢町にて撮影)。



一方高山地帯にもようやく春が訪れ、桜が咲き始める6月上旬、ツマキチョウと良く似たクモマツマキチョウ(上♂下は♀)が姿を現す。この蝶は中部山岳地帯の2500mほどの雪溪上を滑空して、花をめぐる。華奢な割に飛行速度はかなり速い(2004.06.10.南アルプス甲斐駒ヶ岳)。



この項に記されている植物の内容とリスト
---------------------

<b>【VI】 好敵手、桜と椿</b>	01-06-00-1
---------------------	------------

●サクラ=桜	01-06-00-1
1) 桜を楽しむ	01-06-01-1
2) 桜の育て方	01-06-02-1
3) 木花之佐久夜毘売の伝説	01-06-03-1
4) 桜にちなむ美人の物語	01-06-04-1
5) 桜の変遷	01-06-05-1
6) 散り際の美学から花見の心へ	01-06-06-1
7) 日本人の桜観	01-06-07-1
8) 外国人の桜観	01-06-08-1

●ツバキ=椿	01-07-00-1
1) 椿の霊力と信仰	01-07-01-1
2) 鑑賞用の椿と心の椿	01-07-02-1
3) 外国人と椿	01-07-03-1
4) 椿餅と椿油	01-07-04-1
5) 椿と文学	01-07-05-1
6) 椿の栽培	01-07-06-1
7) 椿の繁殖	01-07-07-1
8) 花形からみた椿の区分	01-07-08-1
9) 花色から見た椿の区分	01-07-09-1
10) 椿の花に関わりの深い植物用語	01-07-10-1

<a href="#">目次に戻る</a>
-----------------------